

大連経済交流ミッション参加報告

5月20日から25日まで、6日間の日程で岩手県と(社)岩手県産業貿易振興協会主催の「大連経済交流ミッション」と銘打った視察団に、本会から鈴木宏延会長と職員3名が参加しました。

本ミッションは、岩手県が本年4月に事務所を開設した中国大連市と県内企業との経済交流、また観光における交流の促進を目的に、「食品・物流」「工業・情報・物流」「観光」の3つのコースに別れ、計120名が参加し実施されました。

本会参加者は、「食品・物流コース」と「工業・情報・物流コース」をそれぞれ視察してきました。

出発の日 【5月20日(金)】

出発日当日12時15分から、花巻空港にて、出発式が行われ、ミッション団長の岩手県議会の藤原議長より、挨拶のあと、「食品・物流コース」団長の本会鈴木宏延会長のほか、「工業・情報・物流コース」団長の村田源一朗岩手日報社会長、「観光コース」団長の渡辺勉花巻市長それぞれから挨拶があり、一行は中国南方航空のチャーター機に乗り込み、一路「大連周水子国際空港」を目指しました。

雲の上を飛ぶこと三時間余り、現地時間午後4時半をまわったころ、無事大連空港へ到着しました。空港の外に出ると、日本人と察した青年たちがそれぞれのお店のパンフレットを手に、我々目掛け突進してきました。手に渡したり、無理やり上着のポケットに押し込んだりと、なかなか商魂たくましいところを見せてくれました。そんな歓迎?のあと、コース毎に別れミッションがスタートしました。

この日は、各コースともホテルにチェックインした後、大連市対外貿易合作局との会食会に出席し、各テーブルの合作局の方と懇談しながら(合作局の方は日本語が上手でした。)中華料理を楽しみ、1日目を終えました。



「食品・物流コース」

大連市は中国東北部の経済・物流の中心都市ですが、中でも大連港は、東北地区最大の港であり、世界の140余りの国家地区と海運航路を結び、取扱量も2003年が1.26億トン(前年比12.6%増)と好調です。本コースの視察先は、水産加工施設関係が4件、その他商業施設関係3件と合計7箇所。水産加工施設は、4工場とも広大な敷地の中で近代的な設備を持つ超優良企業でした。日程に沿って水産加工施設の概要を中心に説明します。(なお、商業施設はその内2箇所はマイカル、イトーヨーカドー等日系企業で、日本にある大型店そのままでしたし、ウォルマートも正に日本の大型ディスカウントストアそのものでした。)

・2日目(5月21日(土))

午前中は、港湾・物流施設(遼寧省大連海洋漁業集団公司(略称:遼漁集団))を視察。約40社の企業グループで、敷地2万㎡、従業員7,000人、資本金20億元(約260億円)。主な事業は、1.水産加工場、2.魚市場や貿易、3.造船、漁船修理 4.建築他(発電所もあり)。水揚げ年間25万トン、加工品の年間取扱60万トン、近海遠洋漁業の所有漁船100隻、輸出は水産物全体の70%。年間売上げ30億元(約390億円)等々。なお、当日は、大きな体育館みたいな魚市場(建物)の中で養殖用の小魚のセリの場面を見学しました。別室で遼漁集団の概要を説明いただいた呂大強氏のお話の中で、印象的だったのは、平均賃金を問われた時、特に技術者は「能力給」制度を採用しているの、単純には



答えられないが（それだけ個人の技術力等により、差が大きいということのようです。）無理して計算すれば、1万円位/月とのこと。午後は、マイカル大連商場、ウォルマートを視察した後、4月に開設した岩手県大連事務所を見学。

・3日目（5月22日（日））

午前中は、まず、大連日本工業団地の敷地内を視察したのち、「工業コース」と同様に旅順、203高地、水師営等を観光。なお、大連日本工業団地は、大連市人民政府の許可する6大重点開発の工業団地の一つであり、場所も好位置にあり、海外投資家の受入団地として、現在、売り出し中の工業団地（第1期計画面積は40万㎡）とのことでした。



・4日目（5月23日（月））

午前中は、まず、最初が主に「アワビの陸上養殖の研究」をしている「**大連市水産研究所**」。大連市が香港との合併により設立。投資額は1,000万米ドル。従業員650名、研究員100名の体制で研究員も養殖現場に従事し、24時間体制により交代で養殖場を管理している。アワビは、専用育苗室で稚貝から2～3年かけて育て、更に中間育成場で、3～4年かけて大きな貝に育てる。一番気を使うのが水質であり、沿岸から500m先の海洋深水を取水（75,000t処理量/1日）し、エアレーションも行う。年間出荷量は輸出が70t、国内が50tの計120tであり、これは、本県のあわび出荷量の1/3～1/5位に相当するとのこと。次が、HACCP対応の加工場で「**大連金山水産有限公司**」。当初は国営企業として1985



年設立し、その後、合併会社として独立。現在は、冷凍、調味、海藻類、エキスなどの加工製造工場を設置し、生産、加工、科学的研究を行う総合的な水産物加工企業に成長。因みに、工場総面積は72,000㎡、床面積は33,000㎡、海水養殖面積800haで、生産と販売による輸出割合は全体の98%。HACCP品質管理による当社の商品は、新鮮なイカ製品（20種類）わかめ製品（10種類）その他各種の魚介類で、日本を始めとしてアメリカ、香港など世界各地域に輸出され、好評を博しているとのこと。また、「金山ブランド」は大連市の銘

柄商品にも認定されている。午後は、**大連天寶綠色食品有限公司**を視察。1997年9月に資本金4,000万円で創立し、会社の建物総面積は5万㎡、8,000tの冷蔵庫と10,000tの調温庫を完備。農産物と水産物、それらの加工品の生産並びに輸出を主とする企業。生産する主な農産物関連製品は、カボチャの種、干し果実、冷凍食品等、水産物関係の製品は冷凍のカレイ・タラ・鮭の切身等で、日本、ドイツ等から最新食品加工処理技術を導入し、ISO9001国際認証と米HACCPを取得。年間生産能力は5万tで、製品は日本等世界20カ国に輸出され50社を超える企業と長期取引を実施。当社の生産した製品は、中国食品工業会から「国家級品質衛生安全食品」として評価され、また、大連市人民政府からは長年連続して「年度優秀企業」の賞を受賞。同行した参加者も「こんなに衛生的で整備された施設は今まで見たことが無い」という感想が多く聞かれました。

・5日目（5月24日（火））

午前中に空路で北京へ移動し、午後は**イトーヨーカ堂有限公司**（中国会社名：**華糖洋華堂商業有限公司**）を訪問し、社長の麦倉弘氏と営業本部長の佐野正之氏から、イトーヨーカ堂グループの中国での事業展開の概要について、お話をいただきました。1998年に北京で初めて業態GMS（総合量販店）を開店してから、約8年経過し、現在北京に5店舗の営業で、社員とテナントで約3,300人を雇用。2007年までに10店舗（計25,000人の雇用）を予定。お話の中で印象的だったのは、他社との差別化。

開店当初は、従業員教育の徹底。昔の配給制度の名残で、お客は来て当然の感覚。しつけ、身だしなみ、挨拶等の「基本」を徹底させたとのこと。リーダーも社員と共に汗を出して働く。棚卸を毎月実施（日本は年2回）し、売上の低い店員は、給料から差し引く制度（成果主義）を採用とのこと。次に、バスの中から市内名所等を見学後、バスを降りて「天安門広場」を散策し、夕食は、市内ホテルで、中国水産流通加工与協会の幹部と会食。最終日の25日は他のコースと共に、7時過ぎ発のチャーター便で北京空港を飛び立ち、お昼前に花巻空港に到着いたしました。



終わりに、本コースに参加して、最も印象的だったのは、やはり、中国には広大な土地があり、その土地は国の所有なので、都市開発等は無有を言わず、国の計画どおり進められることでした。更に、都市部と農村部の所得格差が大きいことと、都市部でも成果主義が浸透し、能力給などにより、格差は大きいということでした。

「工業・情報・物流コース」

大連は、中国東北地域での工業に関しても中心となっている地域で、政策を背景とした様々な区域、団地等があり外資系企業にとって投資のしやすい環境が整っている地域です。本コースでは、製造業・IT関係の特別区域や施設を中心に、3つの特別区域、2つの団地と2つの大学を視察してきました。

・ 2日目（5月21日（土））

朝からの生憎の雨模様のなか、岩手県大連事務所を見学したあと、大連市を挙げての大イベントであるアカシア祭りの開幕式に向かいました。開幕式の時間になると雨も止み、パレードでは花巻市からの鹿踊りも披露され中国人観客からもたくさんのシャッターを切られていました。

開幕式会場を後にし、我々は次の視察先である大連市輸出加工区内にあるアイリスオーヤマ現地法人の**大連アイリス生活用品有限公司**に向かいました。当工場の規模は、敷地 91,000 m²、工場床面積 45,000 m²、従業員 2,350 名、年間売上高約 600 億円（2004 年）。当工場以外に大連アイリスグループとして 3 社が操業中。総経理から会社概要の説明を受け、工場内を見学しました。社員への日本語能力に合わせた手当の支給、日本語教室の開催などの効果もあってか、工場内に入ると現地社員の方々が、「いらっしやいませ」・「おはようございます」と日本語で我々に挨拶をしてくれました。工場内は整理整頓され、きれいで非常に管理が行き届いている印象でした。

そのあと保税区内にあるアルプス物流（株）が中国企業との合併で設立した**大連泰達アルプス物流有限公司**を訪問しました。こちらでは保税倉庫運営、部品配送、国際貿易を中心に総合物流事業を展開しており、倉庫内はきれいに整理され、日本とまったく変わらない管理がされていました。ただ違っているのは、同じ倉庫内で、まだ中国国内に入っていないものと、国内に入っているものの区別があることでした。

午後は、**大連経済技術開発区**で説明を受けたのちアカシア祭りのパーティに出席し、2日目の日程を終えました。

・ 3日目（5月22日（日））

午前中、食品・物流コース同様に大連市郊外の大連日本工業団地で説明を受けた後、旅順へ戦跡視察に向かいました。203高地・東鶏冠山・水師営と見学したあと、午後は、大連市内へ戻りマイカル大連商場を視察しました。店舗内は、日本のそれとまったく変わらず若者や家族連れなどで賑わっており、商品の陳列も同様にきれいにディスプレイされていました。地下の食料品売り場では、日本の食品も売られており、日本での売価の1.5倍以上の値で売られていました。しかし、売り場に

訪れる中国人は、服装などから判断するとやはりある程度以上の収入を得ている階層の人に見受けられました。他には、現地駐在の日本人家族の姿も見られました。

・ 4日目 (5月23日 (月))

午前には、**大連ソフトウェアパーク**を視察しました。当パークには、200社を超える企業が入居しており、日本企業も含め世界の主たるITメーカーから中小企業等、外資系が3割以上を占めているとのこと。またパーク内にはIT技術者養成の民間大学である東北大学東軟情報学院もあり、人材はその大学卒業生からも入居企業に採用されるとのことで、人材の供給も含めた当パークの戦略に驚きました。午後には大連理工大学を視察したところ、ちょうどこの日の午前中、岩手大学の訪問団が訪れ、両大学の学術交流協定の締結が行われたとの事でした。また、この日の晩、岩手県と宮城県合同の大連事務所開所記念レセプションが370名参加のもと盛大に開催され、我々ミッション参加者も出席しました。

・ 5日目 (5月24日 (火))

朝の便で北京へ移動し、午後は中国のシリコンバレーと呼ばれる中関村サイエンスパークに向いました。当パークには、IBMを買収したことで知られる中国パソコン大手の連想集団の本拠地があり、外資系企業も多数入居、従業員数は2002年に40万人を突破しているとのことでした。

北京市内に戻り、「工業・情報・物流コース」最後のメニューである「**中国における知的財産権の侵害と保護の現状**」と題したセミナーをJETRO北京センター秋葉隆光氏より受けました。セミナーでは、様々なニセモノの紹介、ニセモノに対する取組みなどについてお話がありました。ご存知の通り



大連理工大学と巨大な毛沢東像

中国ではいまだに特許・商標・意匠などに関係なく、どこかでニセモノが作られ、いつの間にか市場に出回り、海外にまで輸出されているという状況で、ひどい事例では、ある工作機械メーカーの製品が本物よりニセモノのシェアの方が大きくなってしまっているとのことでした。被害にあった企業は、ニセモノを製造している企業・拠点を自分らで見つけ出さなくてはならず、見つけ出すだけでも専門業者に依頼し手付金で数百万円以上かかるとのことでした。そのような状況の中、中国の日系企業は、現地商工会のメンバーらで、北京IPG・上海IPGなどのグループを立ち上げ中国政府機関、日本政府、欧米の団体等と連携を取りながら知的財産権問題に取り組んでいるとのことでした。被害にあった企業は知的財産権侵害について、粘り強く、毅然とした姿勢で権利を行使していくしかないとのことでした。

今回のミッションで視察したそれぞれの団地は、入居企業に対して税制の優遇、当局のバックアップなどがあり、外資系企業が中国へ進出しやすい環境が整っているという印象でした。特に大連市は中国国内で一番対日感情の良い地域であり、また、日本語を話せる人材が豊富でもあるので日系企業の進出先としては秀でている地域であるという印象でした。

人件費については以前より上昇しており、外資系企業の技術者・管理者の中には、月10～30万円という給料のサラリーマンもいるということで、中国国民の購買力もかなり高くなっているようです。ニセモノ問題、法規制の改変、商慣習の違い、反日感情など、様々なリスクはもちろんあるのですが、ビジネスチャンスが中国にあることは、確かであると感じて帰国しました。



記念レセプションの様相